

# 農業総合研究センター かわら版

第50号 平成21年6月4日 発行

山形県農業総合研究センター 研究企画部

〒990-2372 山形市みのりが丘6060-27

電話：023-647-3510

研究企画部では、編集に関する皆様からのご意見ご要望をお待ちしております。

## 吉村知事がセンターで田植え ～山形県農業総合研究センター～

吉村知事が5月15日に農業総合研究センター(山形市みのりが丘)で、水稻新品種「つや姫」の田植えを行いました。「つや姫」は水田農業試験場が開発し、平成22年に本格デビューが予定されている期待の新品種です。

吉村知事が手植えしたのは、原原種で平成24年に生産者が作付けするための種子となります。吉村知事にとって田植えをするのは初めてだったそうですが、今年秋に先行販売する新品種への期待を込めて一株ずつ丁寧に植え付けを行いました。



## 放牧が始まる ～畜産試験場～

ゴールデンウィークが終わり各地で放牧が始まりました。当試験場では5月12日に入牧式が行われ、肉用牛32頭、乳用牛20頭の計52頭が無事入牧しました。

今年度からは「低投入型放牧と受精卵活用実証事業」ということで、肉用繁殖牛では繁殖機能回復効果と長期不受胎牛の採卵、乳用牛では受精卵移植とソーラー電牧による草地の集約利用、また、牧草地に関しては施肥量を節減し、土壌ミネラルを改善した低投入型放牧の実証を行います。

活発な牛やおとなしい牛などさまざまな性格の牛たちは、10月末まで放牧場で過ごし、その後各農家へ帰っていきます。



おとなしく  
体重測定



移動中に  
つまみぐい

農業技術研修生（JA 営農指導員）の研修始まる ～水田農業試験場～

5月1日から10月末日までの6か月間にわたり、米の生産技術を習得するため、庄内たがわ農業協同組合から3名の営農指導員を受け入れることになりました。入組時期はそれぞれ異なる3名ですが、本年度から営農農政米穀係に配属されたことを契機に当水田農業試験場で実習中心に研修することとなりました。

研修初日の5月1日は、育苗管理（追肥）、新品種「つや姫」の作期試験の移植（手植え）、低アミロース米「里のゆき」の直播試験の直播（シーダーテープ埋設）等フル回転で作業に当たりました。

今後は週4日のペースで水稻の栽培管理技術、新品種開発技術、そして、大豆の栽培管理技術についての研修が予定されています。会場としてはこれまでも1～2名の研修生の受入経験はありますが、3名は初めてです。技術習得もさることながら、研修を通じて研究員との交流、研究成果の活用や現場課題のフィードバックなど将来にわたっての様々な効果を期待しています。



直播の準備作業



「つや姫」をていねいに移植

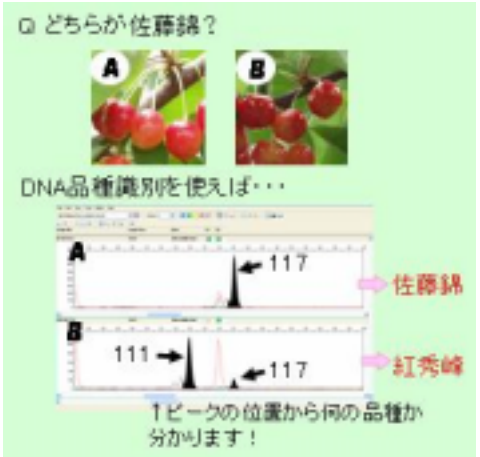
< 研究紹介 >

おうとうやいちごなどのDNA分析による品種識別法の開発 ～園芸試験場～

バイオ育種科では、「紅秀峰」や「紅ゆたか」、などのおうとうをはじめとして、県が育成した園芸品種のDNA分析による品種識別法を開発しています。近年、多くの優良な品種が育成されており、品種という県の知的財産を守るためにも、品種の識別は重要です。品種の識別は、DNAの配列の違いを検出することで行っています。DNAの配列は品種ごとに微妙に異なっています。（ちなみに、ヒトの場合は個人それぞれ0.1%だけDNAの配列が異なり、このたった0.1%が人の個性につながっています。）見ただけでは、なかなかおうとうの区別はつきにくいのですが、おうとうのDNA配列の一部（反復配列）を解析することで、枝変わり品種などを除けば既存品種との識別が可能です。

いちごについてもDNA分析によって、「おとめ心」、「サマーティアラ」と既存125品種との識別が可能です。現在、流通段階での識別を想定して、がく片（へた）や花托（果実）からDNAを抽出できるか検討しています。これらのほかにも、りんごやりんどう、トルコぎきょうなどの県育成品種の識別法を開発中です。

おうとうの品種識別



いちご果実からのDNA抽出



## 普及現場から研究成果の活用状況

西村山地域～枝物花木生産について

西村山農業技術普及課 深瀬 靖

西村山地域の花木生産は、平成 15 年頃まで啓翁桜を中心とした冬春出荷の促成物がほとんどでした。しかし、生産者は季節感が味わえる夏秋出荷を含めた周年出荷を模索していました。

一方、園芸試験場では、今後の転作田活用を見据え平成 10 年度から花木研究に取り組んでいました。その結果、平成 20 年度までの 10 年間に 25 件の成果情報が発信されました。



園芸試験場での視察研修風景



この間、西村山地域では、毎年春に園芸試験場の視察研修を行い、また、研修会で最新の研究成果を説明いただき、情報交換を行ってきました。

このような取り組みの結果、新たな花木品目の生産が大幅に増加しています。特に、図 1 に示した品目はすべて園芸試験場にて試験した品目であり、それら品目を中心に生産拡大が進んでいます。

今後も、普及課がこれまでの研究成果によりさらに普及拡大を進め、園芸試験場を始めとする関係機関と連携しながら、周年花木産地確立に向け取り組んでいきたいと思えます。

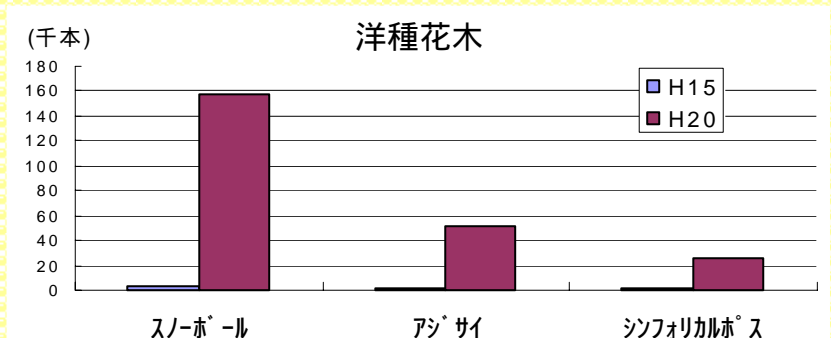
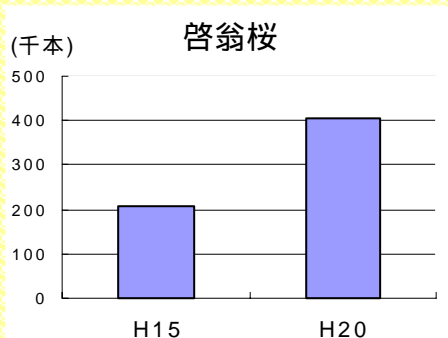


図 1 試験実施品目の拡大状況（出荷本数）

## 普及現場から研究成果の活用状況

農業総合研究センター「かわら版」50号に寄せて 北村山農業技術普及課 深瀬庸之

平成17年に“創刊”された農業総合研究センター「かわら版」の第1号は「大好評さくらんぼナビ」で、1頁でありました。その後、年間発行回数と各号の内容が充実され、毎回興味深く拝読しております。「かわら版」では、各試験場のイベントや職員の学会表彰、学位取得情報、公募課題採択情報等、幅の広いニュースが発信されています。中には研究成果以上に興味のある話題もあり、公私にわたり情報を活用させていただいております。

さて、当農業技術普及課は飼料イネ（稲発酵粗飼料）の低コスト生産と黒毛和種肥育牛への給与の推進について取り組んでおり、5月20日には飼料イネ専用品種を使用した湛水直播の実演会を行いました。管内で飼料イネの生産と利用を普及する上で、畜産試験場の研究成果を根拠技術として大いに活用させていただいております。管内は「総称山形牛」の大産地ですが、従来、肥育牛への飼料イネ給与が行われていませんでした。理由は飼料イネ中のβ-カロテン（ビタミンA）制御技術が確立されていなかったためです。（高品質牛肉の生産には、生育ステージごとのビタミンA制御が必要。）ところが、20年度の畜産試験場の研究成果として、飼料イネを年間給与した黒毛和種の素晴らしい枝肉成績（フィールドデータ）が示されました。稲わら給与の対照区と同等の「A5」水準の枝肉であり、しかも脂肪交雑・ロース芯面積等は最高水準でした。この研究成果は誠に心強く、現在は**肥育牛に飼料イネ給与をすすめる**普及課題を力強く推進することができます。



畜試現地試験に係る飼料イネ調製風景  
(20.10.2)



尾花沢市鶴巻田での飼料イネ直播実演会  
(21.5.20)

私ども普及指導員は農業総合研究センターの最新の試験研究成果（データ）を期待しながら普及活動に勤しんでいるところです。研究成績検討会にも参加させていただいておりますが、「かわら版」に予告編や裏話などの記事が掲載されれば、成績検討会の楽しみが増すような気がします。

また、お聞きするところ、「かわら版」は報道のプロである新聞記者も見えており、「かわら版」がきっかけで地元新聞に同様の記事が報道されたこともあるそうです。「かわら版」の耳よりの情報発信と継続を普及現場から御期待申し上げます。

### < 編集後記 >

今回、「普及現場から研究成果の活用状況」を農業技術普及課のお二方に執筆していただきました。ありがとうございました。

「かわら版」は今回で50号を迎えました。創刊は試験研究機関の組織の改編により、農業総合研究センターとなった平成17年7月です。発行のねらいは、試験場の取り組みなどを広く紹介し、多くの方々からの意見をいただき、今後の研究に役立てることにあり、職員一同趣向を凝らし発行に努めてきたところです。

今後とも、「かわら版」で多くの情報を発信し、研究の充実を図り、社会に貢献できる組織でありたいと考えておりますので、御協力、御支援をよろしく申し上げます。（K）